

<様式>

学 校 名	山形市立第一中学校 山形市松波三丁目 1 番 1 5 号 TEL:622-0121 FAX:633-9797	校 長	細谷 直樹
		研究主任	安孫子 芳
研究 主 題	「わかる喜びを実感し、自ら学び続けようとする生徒の育成（2 年次）」 ～探究的な学習の充実を目指して～		
研究 主 題 設 定 の 理 由	本校では、昨年度から「わかる喜びを実感し、自ら学び続けようとする生徒の育成（1 年次）」～探究的な授業づくりを通して～」の研究主題のもと、校内研究を行ってきた。 これまでの本校の生徒は、全国学力・学習状況調査の質問紙の回答で「自己有用感」や「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取り組み状況」に関わる項目において、全国や県と比較すると低い傾向が見られた。これらの設問に肯定的な回答の生徒ほど学力との相関関係が高いと分析されていることと、これまでの実践における生徒の姿から、教科の授業や「総合的な学習の時間」の中で探究学習に取り組むことが「自ら学び続けようとする生徒」の育成につながると考えた。今年度 3 年目になる「総合的な学習の時間」における探究学習を継続するとともに、教科の授業でもより一層探究的な学習を進め、教科横断的な学習につなげていきたい。 特に、「総合的な学習の時間」における探究学習は今年度で 3 年目になる。昨年度の探究学習の振り返りで生徒は、自分に身に付いた力として「発表力」「調べたことをまとめる力」「必要な情報を選ぶ力」はもちろん、「積極性」「コミュニケーション力」「自分の気になったことを探究する力」「調べたことから自分で答えを考える力」「自分から他の人に意見を求める力」「人と協力し、共有して進める力」を挙げていた。探究学習の中でのさまざまな人との関わりが生徒の学ぶ意欲にもつながっていることがわかった。今年度は日常の教科の授業の中でも教員同士や生徒と関わる場面を増やし、探究的な授業づくりを一層進めていきたい。		
研究 の 目 標	本研究は、本校の学校目標「ふるさとに誇りをもち 学び続ける人間の育成」の具現化のために、「わかる喜びを実感し、自ら学び続けようとする生徒を育成すること」を目標とする。そのために、「総合的な学習の時間」に探究学習を推進していく。また、各教科で育成した資質・能力をもとに「総合的な学習の時間」に「探究」を進める一方で、そこで培った資質・能力を生かして各教科での学びを深めていき、相互の学習で「自ら学び続けようとする生徒」の育成に努めたい。		

研究の内容	(1)「総合的な学習の時間」における探究学習の推進 ・山形大学と連携しながら探究学習を進める。 ・課題を解決、検証するための実験や調査など生徒自身が動く場面の設定。 (2)各教科における探究的な授業づくり ・生徒が主体となる課題設定→展開→振り返り・まとめのサイクルを意識した単元づくりを行う。 ・「1のつく日はみてみて Day」を設定し、お互いの授業を参観し、教員相互で授業づくりを行う機会を設ける。 (3)教科の学びと総合的な学習の時間の学びを相互に活用・発揮した資質・能力の育成																		
研究の方法	1 研究推進委員会を開催し、理論研究とスケジュールの調整を図る。 ・毎週水曜日に研究推進委員会を開催する。 ・外部機関との調整を図る。 ・教育課程を調整する。 2 教科部会を通して授業改善に取り組む。 週1回の時間割の中に組み込み、研究主題に即し、かつ教科の本質に迫る授業構想や指導案検討等を行う。 <table><tr><td>第1回</td><td>校内研修会</td><td>令和7年</td><td>7月29日(火)</td></tr><tr><td>第2回</td><td>校内授業研究会(総合的な学習の時間)</td><td>令和7年</td><td>9月8日(月)</td></tr><tr><td>第3回</td><td>総合的な学習の時間 授業公開</td><td>令和7年</td><td>11月20日(木)</td></tr><tr><td>第4回</td><td>校内研修会(まとめの会)</td><td>令和8年</td><td>2月27日(金)</td></tr></table> 4 各自の授業実践 「1のつく日はみてみて Day」を実施する。 5 校内研究のまとめ 2月末に成果と課題について考察し、次年度以降の校内研究につなげる。			第1回	校内研修会	令和7年	7月29日(火)	第2回	校内授業研究会(総合的な学習の時間)	令和7年	9月8日(月)	第3回	総合的な学習の時間 授業公開	令和7年	11月20日(木)	第4回	校内研修会(まとめの会)	令和8年	2月27日(金)
第1回	校内研修会	令和7年	7月29日(火)																
第2回	校内授業研究会(総合的な学習の時間)	令和7年	9月8日(月)																
第3回	総合的な学習の時間 授業公開	令和7年	11月20日(木)																
第4回	校内研修会(まとめの会)	令和8年	2月27日(金)																
研究の計画	校内研究の年間計画 <table><tr><td>4月</td><td>校内研究会の方向性について・開催時期について(検討)</td><td rowspan="7">↓</td><td rowspan="7">各自の授業実践 「1のつく日はみてみて Day」</td></tr><tr><td>5月</td><td>今年度の研究の方向性について(共通理解)</td></tr><tr><td>7月</td><td>校内研修会(探究的な授業づくりについて)</td></tr><tr><td>9月</td><td>校内授業研究会(総合的な学習の時間)</td></tr><tr><td>11月</td><td>総合的な学習の時間 授業公開</td></tr><tr><td>2月</td><td>研究のまとめ作成</td></tr><tr><td>2月末</td><td>校内研究まとめの会</td></tr></table>			4月	校内研究会の方向性について・開催時期について(検討)	↓	各自の授業実践 「1のつく日はみてみて Day」	5月	今年度の研究の方向性について(共通理解)	7月	校内研修会(探究的な授業づくりについて)	9月	校内授業研究会(総合的な学習の時間)	11月	総合的な学習の時間 授業公開	2月	研究のまとめ作成	2月末	校内研究まとめの会
4月	校内研究会の方向性について・開催時期について(検討)	↓	各自の授業実践 「1のつく日はみてみて Day」																
5月	今年度の研究の方向性について(共通理解)																		
7月	校内研修会(探究的な授業づくりについて)																		
9月	校内授業研究会(総合的な学習の時間)																		
11月	総合的な学習の時間 授業公開																		
2月	研究のまとめ作成																		
2月末	校内研究まとめの会																		

<様式>

学 校 名	山形市立第二中学校 山形市西崎 6 2 TEL 644-3902 Fax 645-8253	校 長	加 藤 ゆ か り								
		研究主任	二 藤 部 由 美								
研 究 主 題	自分の考えをもち、根拠を明らかにして表現する力の育成（1 年次） ～ I C T 等の活用による学習の個別最適化と協働的な学びを通して～										
研 究 主 題 設 定 の 理 由	昨年度は「生徒が主体的に学ぶ・話す・活かす力の育成」をメインに研究を進めてきた。特に電子黒板やデジタル教科書などがここ数年で一気に導入されている実態を踏まえ、「ICT 機器の活用」に力を入れてきた。その結果、生活状況調査の「授業で PC、タブレットなどの ICT をどの程度活用したか」の質問に対して週 3 回以上と回答した生徒が 78.9%（前年度 66,8%）と大幅に増加した。弱点を把握してその対策を行ったり、思考の流れを可視化したりしたことが生徒の理解や意欲の向上につながり、協働的に課題を解決する中で ICT 機器を活用していく良さを実感できたと考えられる。教員も授業力の向上という視点から、機器の活用方法を能動的に身につけようという意識をもつことができた。 （2 学期生活状況調査より） <table><thead><tr><th>項目</th><th>肯定的回答</th></tr></thead><tbody><tr><td>1 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。</td><td>91.8%</td></tr><tr><td>2 授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っている。</td><td>94.0%</td></tr><tr><td>3 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。</td><td>78.3%</td></tr></tbody></table> 一方で、2 学期末生活状況調査結果によると「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。」の項目が他の質問項目と比べて低い結果である。自分の考えを筋道立てて相手に伝えること、粘り強く課題を追求し、学習を深めようとする態度に弱さがあると言える。今年度からの高校入試（特色選抜）においても自分の考えを相手にわかりやすく伝えていくことが重要になっており、相手意識をもって表現する力をつけることが今後の課題と言える。 以上のことから、今年度は探究的な学び、協働的な学びに重きを置き、自分の考えを、根拠を明らかにして聞き手にわかりやすく伝えるという点に力をいれる。昨年度の研究を踏まえ、ICT 機器の活用を含めた多様な手立てをもとに課題解決ができるような授業づくりについて研究を進めていきたいと考えた。			項目	肯定的回答	1 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	91.8%	2 授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っている。	94.0%	3 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。	78.3%
項目	肯定的回答										
1 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	91.8%										
2 授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っている。	94.0%										
3 授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。	78.3%										
研 究 の 目 標	本研究は、本校の教育目標である「未来に向かって主体的に生きぬく生徒の育成」の実現を目指し、生徒の主体性を育むことと教師自身の授業力向上を目標としている。その際、学習指導要領で重視している「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点に立ち、各教科等における生徒の資質・能力を確実に定着させていきたいと考えている。そのためには「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的にとらえた授業づくりが重要になる。その実現に向けて、本研究では ICT を活用した新たな教材や学習活動等も積極的に取り入れ、学習活動が「個別最適な学び」や「協働的な学び」の充実に効果を上げているか確認しながら、自分の考えをもち、表現できる生徒の育成につなげていく。 目指す生徒の姿 （1）自分の学習状況を把握し、自立的、意欲的に学びに向かう生徒 （2）「自分」「物事」「人」に向き合い、かかわり合いの中で自分の考えや思いを表現できる生徒 （3）他教科や生活の中で活用できる知識を身につけ、学んだことを課題解決に活かすことのできる生徒										

研究の視点	(1) 主体的・協働的に学びたくなる探究課題（単元のゴール）の設定 ・必要感のある課題 ・生徒が自ら立てた課題 ・一人では解決できない課題（難易度） ・多様な考えが引き出せる課題 ・生徒の生活体験に根差した課題 など (2) 思考・判断・表現する場面の設定 ・学習の見通し（自分の力でここまではできるが）がもてる学習過程 ・相手意識、目的意識を明確にした学習活動 ・必要なもの（ICTを含む）や相手を選択し、協働的に解決できる学習過程 以上を意識しながら、「課題把握、対話を通した学び、振り返り」のサイクルを単元やそれぞれの時間でまわしていく授業づくりを行う。	
研究の内容・方法	(1) 研究推進委員会を毎週水曜日に実施し、情報を共有しながら本研究をすすめていく。 (2) 学校教育目標の具現化のため、校内研修等を含めた授業改善と生徒一人一人の学力向上を一体的に捉え、全職員の共通理解のもとに組織的・計画的に研究活動を推進する。 (3) 研究授業の実施 ・研究テーマ及び、研究の視点に沿った授業を行う。 ・教科ごとに生徒の実態を把握し、1学期に第1回授業研究会を実施する。国語部会、社会科部会、数学部会、理科部会、英語部会、技能教科部会にわかれ、各1名ずつの授業提供を行う。部会ごとに事前研、事後研を行い、研究テーマや今年度の重点を共有する。外部指導者を招聘し、指導を仰ぐ。 ・それ以外の先生方は、第1回授業研究会で出された成果や課題をもとに、2学期以降略案を作成して授業を実施し、部会等で研究を深める場を設定する。 (4) 実践の共有 ・教科で行った研究授業の成果と課題を職員会議等で報告し、教科を越えて互いの授業実践に活かせる機会を作る。 (5) 研究紀要の作成 ・年度末に教科ごとの実践を研究紀要としてまとめる。全員で成果と課題について考察し、次年度以降の校内研究につなげる。	
研究の計画	4月中旬	今年度の研究内容の確認
	5月～	研究テーマを踏まえた教科での計画及び実践
	7月9日	第1回授業研究会
	2学期	研究テーマを踏まえた教科での計画及び実践
	1月～2月	各教科の研究まとめ、研究紀要作成
	3月	研究紀要発行（データ）

<様式>

学 校 名	山形市立第三中学校	校 長	丹羽 英樹
		研究主任	村山 一樹
研 究 主 題	自らの可能性に挑戦し続ける生徒の育成 ～深い学びに向かう協働的な活動の工夫～ (2年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校は「自主自立」の精神のもとに設立された。その精神をふまえ、「創造的で心豊かなたくましい人間の育成」を学校教育目標として掲げ、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な他者と協働しながら豊かな心を育てること、そして、生徒が学ぶことの意義を実感できる授業を通して、一人一人の力を伸ばすことを目指してきた。 今年度、本校では育成を目指す生徒の資質・能力として、以下の5つの力の育成に取り組んでいる。 ① 自ら判断し主体的に行動する力 ② 目標実現に向けて、粘り強く取り組む力 ③ 自分の思いや考えを確実に伝える力 ④ 自らの生き方、将来を考える力 ⑤ 様々な人と関わりを持てる力 これらの資質・能力を身につけることで、答えのない問いや即自解決が困難な課題にも粘り強く何度も挑戦し、将来にわたって学び続ける人間になってほしいという願いを込めて、この研究主題を設定した。		
昨 年 度 の 研 究 か ら	昨年度は、探究型学習や系統的な総合的な学習の時間の推進のため、山形大学から講師を招聘し、STEAM教育研修会を実施した。教科横断的学習や探究型学習の進め方についての理解を深めることができた。また共通実践として、指導案上にB規準の生徒の姿を明記し、規準に満たない生徒への具体的な手立てを具体化した。B規準を示したことにより授業者、参観者ともに本時のねらいを整理しやすく、事後研の討議も活発となった。一方で、昨年度の職員アンケートでは「校内研究が5つの資質能力の育成につながったか」という項目については、全体の約4分の1である26%が「どちらともいえない」と回答しており、5つの資質能力と校内研究の結びつきについて課題が見られた。 今年度は、5つの資質能力育成に向けた具体的な手立てを、個人や教科部会で考えることとし、校内授業研や個人の授業実践を通して、生徒の資質能力について教科や学年の枠を越えて全員で考えることを目指し、研究を進めていく。		

研究の目標	(1) 生徒個人が課題を立て、自らの可能性に挑戦する学習活動を通して、目標実現にむけて、粘り強く取り組む力を育てる。(資質能力①・②) (2) グループでの活動や意見を発表する活動を通して、根拠を明確にしながら、自分の考えや思いを相手に確実に伝える力や、様々な人と関わりを持てる力を育てる。(資質能力③・⑤) (3) 総合的な学習の時間における探究学習を通して、地域や社会に対して主体的に行動しようとする力や、自らの生き方や将来について考える力を育てる。(資質能力①・④)												
研究の内容	以下の内容で目標の実現を図る (1) 教科による取り組み(アクション)の設定 ・育成を目指す5つの資質能力について、日々の授業でどの力をどの場面でどのような手段で伸ばすことができるかを教科で考える。 (2) 個人による実践の計画・実施・振り返り ・育成を目指す5つの資質能力について、各個人が今年度の重点項目を決め、日々の授業や自主的(主体的)授業研を実施する。 (3) 指導案への明示 ・授業における生徒のB規準の姿を明確化し、規準に満たない生徒への手立てを具体化する。 ・育成を目指す5つの資質能力について、本時の授業の中で特に伸ばしたい力を指導案に明示する。 (4) 総合的な学習の時間を軸とする探究学習の推進 ・生徒が学びの主体となるために、生徒自らが探究課題を設定し解決を目指す学習計画を設定する。 ・総合的な学習の時間で身につけた探究のプロセスを、各教科における探究型学習に応用する。												
研究の方法	(1) 毎週金曜日に研究推進委員会を行い、校内の研究について吟味する。 (2) 教科部会を週1回の時間割の中に組み込み、研究主題に即し、かつ教科の本質に迫る授業構想や教科研究授業の検討を行う。 (3) 7月に校内授業研を実施する。指導主事を招聘して助言・指導をいただく。 (4) 長期休業中に研修の機会を設け、探究型学習やSTEAM教育への理解を深める。 (5) 研究のまとめとして、校内授業研の成果と課題や、今年度各自が研究主題に即して挑戦した実践についてまとめる。												
研究の計画	<table> <tr> <td>4月</td><td>研究計画提案、校内授業研授業者決定</td></tr> <tr> <td>5月</td><td>教科の取り組み設定</td></tr> <tr> <td>7月</td><td>校内授業研究会</td></tr> <tr> <td>9～12月</td><td>教科授業研究会・特別支援授業研究会</td></tr> <tr> <td>1月末まで</td><td>教科のまとめ、研究紀要原稿締め切り</td></tr> <tr> <td>2～3月</td><td>研究紀要完成 次年度に向けて</td></tr> </table>	4月	研究計画提案、校内授業研授業者決定	5月	教科の取り組み設定	7月	校内授業研究会	9～12月	教科授業研究会・特別支援授業研究会	1月末まで	教科のまとめ、研究紀要原稿締め切り	2～3月	研究紀要完成 次年度に向けて
4月	研究計画提案、校内授業研授業者決定												
5月	教科の取り組み設定												
7月	校内授業研究会												
9～12月	教科授業研究会・特別支援授業研究会												
1月末まで	教科のまとめ、研究紀要原稿締め切り												
2～3月	研究紀要完成 次年度に向けて												

<様式>

学 校 名	山形市立第四中学校 山形市花楸二丁目 1 0 番 4 8 号 TEL 622-3904 FAX 633-9801	校 長	前田 洋光
		研究主任	樋口 里見
研究主題	関わり合いを通して学びを深め合う生徒の育成		
研究主題設定の理由	本校では、「主体的・対話的に学びを深め合う生徒の育成」を研究主題に設定し、各教科の授業実践を積み重ねてきた。令和4年度より計画指導主事訪問型の授業研究を中止し、授業に向き合う時間的余裕を確保し、教職員のゆとりが持てるようにしてきた。また、3学期に開いた「四中生を語る会」では、教職員同士で現在の生徒の状況について意見交換を行い、四中生の良いところや成長しているところ、これから伸ばしたいところについて共通理解を図った。その中で、四中生は素直に課題に向かうことができるところが良さとして挙げられた。一方課題として、生活全般を通して他者とかかわろうとする意識があまり高くないこと、学習面では与えられた課題には取り組むが、主体的に自分の考えを伝えようとしたり、もっと知りたいと向上心を持って臨んだりする様子があまり見られないことが挙げられた。これらの実態を踏まえ、四中生の良さを生かし、各々が学びを深め、これからの社会でよりよく生きるための力をつける学びの場を設定する必要があると考えた。 今年度は関わりを通して学びを深める生徒の育成を目指し、校内研究を行う。各教科の特色を生かし、教科の本質にせまる学習のプロセスをより意識した授業展開が必要であるとともに、学びの過程で、生徒が自分の考えを持ち、様々な関わりの中で新たに視野を広げ、学びを深められるようにしていく。そのため、各教科で身につけさせたい資質・能力を明確に捉え、見通しをもった単元構想と、学習活動を計画していく必要がある。魅力的な単元を貫く課題について研究しつつ、学びを深める関わりをどのように設定するか、関わりの中で授業者はどのようにつなぎファシリテートしていくかの実践を積み重ねていきたい。		
研究の目標	◆学校教育目標「立志 建学 貢献」 ○誇りと志をもち、自立する四中生（立志） ○深く考え、学びを表現し合う四中生（建学） ○互いを認め、未来を切りひらく四中生（貢献） ◆目指す生徒像 関わりの中を通して学びを深める生徒 「主体的に学びに向かい、自ら課題を発見し、既得の知識・技能、思考力・判断力・表現力を総合的に活用して多様な他者と協働する中で、見方・考え方を働かせてより良く課題を解決したり考えを広げたりすることができる生徒」の具現化		

研究 内 容	(1) 主体的に学びに導く単元構成 各教科で単元ごとにつけたい力を明確にし、生徒が主体的に取り組みたくなる課題を設定する。 (2) 協働的な学びに導く学習活動の工夫 生徒が思いを伝え合い、関わって学ぶ場を設定するとともに、授業者のファシリテートのあり方を工夫する。 (3) 次の学びにつながる振り返りの工夫 自己の学びや課題、変容などが見えるような振り返りを行う。
研究 の 方 法	1. 各教員の日々の実践での授業研究 教科・道徳・総合的な学習・特別活動の時間で、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業実践・授業研究を行う。 2. 全職員が一人一授業を行い、各教科部会で授業参観や、事前事後検討会を行う。 3. 校内研修について 定期的に教科部会を開き、教科の目指す生徒の姿や生徒につけたい力を明確にして、授業改善や共通理解に努め、研究を深める。また、校内授業研究会や校外研修、日々の授業等での学びをもとに、情報交換や意見交換を行いながら、教科の本質に迫るための指導改善に取り組む。 4. 相互授業参観について 日常的に教員同士が授業を開き、互いに授業を見合って検討する。教科の目指す生徒の姿や生徒に付けたい力を明確にして、互いに研究を深める。また、校外研修、日々の授業等での学びをもとに、情報交換や意見交換に努め、教科の本質に迫るための指導改善に取り組む。 5. 研究の成果の確認 以下の二つの側面から、研究の成果としての生徒の学力の向上の結果をみとる。 ① 数値 ・全国学力・学習状況調査 ・N R T ・到達度テストの得点状況 ② 数値で表すことができないもの ・全国学力・学習状況調査 ・授業に向かう姿勢 ・学校生活の様子
研究 の 計 画	5月下旬 今年度の研究についての提案 6月～2学期末 授業実践「一人一授業」の提案終了 1月下旬 各教科の成果と課題を受け、来年度の学校研究の検討（研究推進委員会） 「四中生」を語る会 3月 来年度の学校研究の方向性の決定

<様式>

学 校 名	山形市立第五中学校	校 長	佐藤 朋子			
	山形市薬師町一丁目 1 4 番 1 0 号 TEL: 622 - 0559 FAX: 633 - 9802	研究主任	安孫子 知樹			
研 究 主 題	「考え続け、挑み続ける生徒の育成」（1 年次） ～自立トライアングルの 3 つの力を発揮して～					
研 究 主 題 設 定 の 理 由	確かな学力を身に付け自立した学習者になるためには、「認知能力」と「非認知能力」の両方をバランスよく養うことが重要である。さらに現代は変化の激しい社会である。よりよく生き抜くためには、現状を適確に捉え、課題を見極め、その解決を模索試行し、その結果を受けてさらに深く考え、もっと良い解決方法を粘り強く考え続ける力が求められる。 本校では、昨年度から学力の土台となる生徒の「非認知能力」に注目し、どんな素地があれば、学習や生活で課題解決に向かい続けることができるのかに焦点を当て、その素地となる 3 つの力を「自立トライアングル」という図に表し、見える化を図り、生徒と教職員で共有して取り組んできた。それを今年度用に「対話力」「適応力」「挑む力」と再考し、この素地となる 3 つの力を様々な活動場面で発揮することで、より学習効果を高めようと考え、教室や学年フロアに掲示し見える化を図り、授業でもそれらの力を発揮させることに取り組む。 授業づくりにおいては、生徒が考え挑み続けることができる授業を目指し、生徒にとって“考えがいのある課題”の提示、わかったつもりになる一斉指導からの脱却を図り、生徒に委ねる場面の設定、工夫に挑戦する。そうすることで挑み続ける生徒を育成できるのではないだろうかと考え研究主題を設定した。					
研 究 の 目 標	◆令和 7 年度における目指す生徒の姿 自ら学び、考えを深めることに楽しさを感じることができる。 共に歩む仲間を尊重し、互いによりよい関係を築こうとすることができる。 自他のいのちを尊び、目標に向かいいたゆまず努力できる。 ◆育成したい資質・能力 <table><tr><td>知識・技能</td><td>思考力・判断力・表現力等</td><td>学びに向かう力・人間性等</td></tr></table>			知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等				

	基礎的・基本的な知識・技能を着実に獲得しながら、既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより定着を図る。 対話を通して、自分にはない考えを他者から獲得するために、知識・技能を体系化し活用できるようにする。	知識・技能を適切に組み合わせ、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考力。 多様な考えを受けとめ、それらの共通点や相違点を理解し、自己決定できる判断力。 他者との対話を通して、自らの考えをより深められる力。	主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の学習を調整する力。 多様な考えを尊重し、あらゆる状況に適応しながら、様々なことに挑み続けようとする力。															
研究の内容	◆資質・能力を育成する手だて <table><tr><th colspan="3">資質・能力を育む単元構成</th></tr><tr><td colspan="3">単元でつけたい力を明確にし、生徒の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の実態に応じてきめ細かく指導・支援をする。生徒が自らの学習状況を把握し、学習課題を決定したり、学習方法を選択したりできるような単元を構成する。</td></tr><tr><td>学びをつなげる振り返り</td><td>対話的な学び合いの工夫</td><td>指導と評価の一体化</td></tr><tr><td>既習事項、他教科、実社会との関連など、学んだことがつながるような工夫をする。</td><td>生徒同士の協働、教職員や先哲の考え方を手がかりに考える事等を通じて、自己の考えを広げ深める。</td><td>学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る。</td></tr><tr><td>振り返りを通して、学びの自己理解ができるようにする。</td><td></td><td>学習評価を基に教育課程の改善・充実を図るというPDCAサイクルを確立する。</td></tr></table>			資質・能力を育む単元構成			単元でつけたい力を明確にし、生徒の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の実態に応じてきめ細かく指導・支援をする。生徒が自らの学習状況を把握し、学習課題を決定したり、学習方法を選択したりできるような単元を構成する。			学びをつなげる振り返り	対話的な学び合いの工夫	指導と評価の一体化	既習事項、他教科、実社会との関連など、学んだことがつながるような工夫をする。	生徒同士の協働、教職員や先哲の考え方を手がかりに考える事等を通じて、自己の考えを広げ深める。	学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る。	振り返りを通して、学びの自己理解ができるようにする。		学習評価を基に教育課程の改善・充実を図るというPDCAサイクルを確立する。
資質・能力を育む単元構成																		
単元でつけたい力を明確にし、生徒の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の実態に応じてきめ細かく指導・支援をする。生徒が自らの学習状況を把握し、学習課題を決定したり、学習方法を選択したりできるような単元を構成する。																		
学びをつなげる振り返り	対話的な学び合いの工夫	指導と評価の一体化																
既習事項、他教科、実社会との関連など、学んだことがつながるような工夫をする。	生徒同士の協働、教職員や先哲の考え方を手がかりに考える事等を通じて、自己の考えを広げ深める。	学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る。																
振り返りを通して、学びの自己理解ができるようにする。		学習評価を基に教育課程の改善・充実を図るというPDCAサイクルを確立する。																
研究の方法	(1) 週1回の研究推進委員会で研究についての話し合いをもち研究を牽引する。また、研究推進委員会の内容を研修通信や職員会議等で発信し、全職員の共通理解のもと研究を進める。 (2) 教科部会を週1回時間割の中に組み込み、研究主題に即しかつ教科の本質に迫る単元構想や指導案の検討等を行い、授業改善に取り組む。 (3) 校内授業研究会は年2回行う。第1回目(7月7日)は、今年度の研究内容に基づく提案授業を行い、全職員で参観し今年度の校内研究について共通理解を図る。第2回目(11月10日)は第1回目の授業研究会をもとに改善した授業研究会を行う。 (4) 研究の方向性について、教職員で振り返る。アドバイザーとして、小林湧氏(石川県)の助言を仰いで職員研修を行っていく。 (5) 全教科において、年間1回の以上の研究授業を計画的に実施する。教科部会では、単元についての構想を練り合い、今年度の研究に沿った授業を行う。 (6) 年間2回の生徒アンケートを実施し、年間及び経年での生徒の変容を分析しながら、研究の成果と課題を明らかにする。また、年度末に職員アンケートを実施し、次年度の研究の方向性を見定める。																	
研	<table><tr><td>4月3日</td><td>第1回校内研修会(今年度の校内研究について)</td></tr><tr><td>7月7日</td><td>第1回授業研究会</td></tr><tr><td>7月25日</td><td>第2回校内研修会</td></tr></table>			4月3日	第1回校内研修会(今年度の校内研究について)	7月7日	第1回授業研究会	7月25日	第2回校内研修会									
4月3日	第1回校内研修会(今年度の校内研究について)																	
7月7日	第1回授業研究会																	
7月25日	第2回校内研修会																	

研究 の 計 画	7月30日	反省職員会議（自立トライアングルの修正①）
	7月～12月	1教科1授業の検討・実施
	9月上旬	生徒アンケート実施①
	11月10日	第2回授業研究会（市委嘱公開）
	12月中旬	生徒アンケート実施②
	12月25日	反省職員会議（自立トライアングルの修正②）
	2月上旬	各教科で研究紀要作成
	2月25日	第3回校内研修会（今年度の研究のまとめと来年度の校内研究について）
	3月中旬	研究紀要発行

<様式>

学 校 名	山形市立第六中学校 山形市南原町二丁目 3-55 TEL 622-0314 FAX 633-9803	校 長	栗田 和真
		研究主任	岩田 恵美
研 究 主 題	学びに気づき、考え、探究する生徒の育成（1年次） ～探究する姿の明確化～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校は学校教育目標に「気づき、考え、進んで実行する生徒の育成」を掲げ、「まなぶ力」「かかわる力」「やりぬく力」の育成を学校経営の重点としている。また、令和3年度より実施された学習指導要領では、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身につけることを目指している。これらを受けて、コロナ禍に直面した令和3年度からは、「自らの学びを創る生徒の育成」を主題に、4年計画で校内研究を推進してきた。特にまとめの年である昨年度は、「学びのデザインの視点から」と副題を設定して、前3年間で取り組んだ6つの要素「①協働的な学びの場の工夫 ②ICT活用場面の模索 ③妥当性と信頼性のある適切な評価 ④まとめと振り返りの工夫 ⑤授業と家庭学習のつながりの意識化 ⑥『個別最適な学び』の実現」を教師が意図的にデザインすることで教科の資質・能力（3観点）の確実な習得を目指した。 昨年度の実践での成果と課題として、①②③④において、校内授業研究会はもちろん日常の授業の中で様々な手立てを考案して実践することにより、授業者の達成感と授業の充実を図ることができた。特に①では、生徒アンケートの結果で90%以上の生徒が学習効果を感じたと回答し、学校の存在意義を再確認することができた。しかしながら、⑤⑥においては、家庭学習の必要感で、教師側と生徒自身の間に温度差があることを否めない。今後も「何ができるようになるか」「どう使えるか」を意識して、知識・技能の確実な習得と思考力・判断力・表現力等の更なる育成のバランスを取りつつ、学びに向かう力・人間性等の積み上げをより強固なものにしていく必要がある。前研究主題での4年間で培った成果を生かして、今後も自らの学びを創る生徒を育成しつつ、新しい主題の実現に励みたい。 本年度から新しい主題を設定するにあたり、令和の日本型学校教育の理念を追求するため、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指していく。また、今年度からスタートする県立高校入学者選抜の前期（特色）選抜に向けて、「総合的な学習」と「探究学習」を校内研究で推進して、授業で探究する場面をどのように創り出すことができるのかを模索していく。 以上の理由から、今年度は次の目標を設定する。		
研 究 の 目 標	教科での探究する姿を明確にする。 （1）教科経営案を見直し、教科の本質における生徒の探究する姿を明確にする。 （2）新しい教科書での単元計画の中に探究する場面を設定して、授業を実践する。		
研 究 の	《教科部会で》 （1）教科経営案を見直し、教科の本質における生徒の探究する姿を明示する。 （2）新しい教科書での単元計画と評価計画を作成し、探究（課題解決）学習を設定する。 （3）これまで用いた授業のまとめや振り返りのシートに、探究学習の記録の追加を検討する。 《日々の授業で》 （1）教科の資質・能力（3観点）において、探究学習で活用できるスキルを生徒にイメージさせながら、知識・技能を関連付けて確実に習得する方法を模索する。 （2）学習課題または目標を吟味し、明示する。		

内 容	(3) 仲間と一緒に思考する場面や対話により考えを深め合える協働的な学びの場を工夫し、根拠を明確にして意見を述べる力を育成する。 (4) 効果的な学習を実現させるために、I C Tの活用方法を模索する。 (5) まとめと振り返りの工夫を実践し、生徒自身が学びを深めたり調整したりすることができるようにする。また、探究学習を記録して総合的な学習につなげていく。 (6) 生徒自身が課題を設定する場面や解決過程の計画を立てる場面などをどのように取り入れていくかを検討し、「個別最適な学び」の実現を模索する。
研 究 の 方 法	(1) 週1回の研究推進委員会で、研究についての話し合いをもち、提案する。 教科部会を年に5回開催し、研究推進委員会の原案をもとに、教科主任を中心に同一步調で研究に取り組んでいく。 (2) 年間一人一回以上の授業実践を計画し、研究主題に迫る。研究授業の際には、教科部会を設定して事前研究会を行う。研究授業は教科担当者全員で提案する形をとり、授業づくりに関わる。校内授業研究会当日に事後研究会を行う。(道徳は隔年で授業研を行うので、今年度はなし。) (3) 教科ごとに、研究主題にせまるための具体的な方策を設定して実践する。 ①一時間や一単元の見通しをもたせ、一時間や単元の適切な場面でまとめと振り返りを行うという共通実践を行う。また、探究学習に活用できるスキルや探求学習のイメージを、教科全体で統一したものにする。 ② I C Tの有効な活用については、授業を参観できる機会をつくり、多くの先生が授業に活かせるようにする。また、実践した内容、成果、課題等を記録し次へつなげる。 (4) 1学期と2学期末にアンケートを実施し、成果と課題を把握する。
研 究 の 計 画 画	《年度初め》 - 校務分担・教材の決定、年間計画の確認、授業者（該当教科）の決定（4月1日 教科部会①） - 教科経営案・評価規準・評価基準・教科ガイダンス資料の検討（4月2日 教科部会②） - 今年度の研究内容と計画を研究主任より提案（4月4日 職員会議） 《1学期》 - 教科経営案の作成 1学期分の評価計画・基準の確認、指導案検討、一人一実践の計画（5月12日 教科部会③） 校内授業研（大研）6月6日(金) 予定教科：1コマで4教科（社会、数学、英語、保体） - 一人一実践（授業研を行う教員以外にも、1人1授業として一回は指導案を作成、学年団・教科担当者に配布し、授業を行う。2月初旬までを目安に各自設定） - 第1回学習アンケートの実施（7月中旬） 《夏休み》 「探究学習とは（仮）」についての校内研究（7月28日） 2学期分の評価計画・基準の確認、一人一実践の確認（7月28日 教科部会④） 《2学期》 - 一人一実践（1学期から引き続き） - 第2回学習アンケート、教員用アンケートの実施（12月中旬） - 今年度の各教科の成果と課題のまとめ、3学期分の評価計画・基準の確認 (12月24日 教科部会⑤) 《3学期》 - 今年度の研究の成果と課題をまとめる（2月） - 今年度の研究の成果と課題提案（研究紀要の原稿作成） - 研究紀要の発行（3月） ＜その他＞ - 年間を通して、I C Tの有効な活用授業について実践を重ね、記録していく。 - 今年度も、研究推進委員会、学習指導部、探究I C T推進部、総合的な学習担当、自主的に実践を試みて頂ける先生方が中心となって進める。

<様式>

学 校 名	山形市立第七中学校 山形市天神町 2 5 2 0 番地 TEL 6 8 4 - 7 5 5 5 FAX 6 8 4 - 6 4 5 9	校 長	沢口 肇
		研究主任	花輪 靖子
研 究 主 題	主体的に学び続ける生徒の育成（４年次） ※サブテーマは個人研究として各自で設定する		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	令和６年度は「主体的に学び続ける生徒の育成～疑問や思いを引き出す授業展開の工夫～」という研究主題のもと、疑問や思いを引き出すことで主体的に学び続ける生徒を育成できるよう研究に取り組んできた。「個が課題に対して、自分が解決したいものとして捉えている姿」「個が試行錯誤して納得解を求める姿」という具体的な目指す生徒の姿を設定し、その姿に迫るために、週に１回の教科部会での授業検討や情報共有、また、研究授業も含めた個人実践「ひとり一授業」の実施に伴う事前研および事後研を行う中で指導改善を行ってきた。その結果「疑問や思いを引き出す授業展開の工夫」について、「魅力的な課題設定（発展的な課題、必要感のある課題）」「導入の工夫」「生徒の思考を引き出しその思考を整理する」「生徒の思考のための時間の設定」「問いの解決に向かう方法を吟味させる」といったポイントが見えてきた。これらのポイントを押さえて目指す生徒の姿に近づくことができた授業では、疑問や思いから、生徒が必要感を持って課題に取り組み、他者との学び合いを自ら求める姿が見られた。一方で、ポイントが不明確だったため、生徒の疑問や思いを十分に引き出せなかった授業では、一部の生徒の発言はあるが多くの生徒の思考に至っていない姿や、活動が学びにつながらない姿が見られた。 これらを踏まえて、「主体的に学び続ける生徒の育成」に対して、改めて研究を深めたいことが次のように出てきた。「生徒主体の授業作り」「発達段階に応じた学び」「単元構成・課題設定」「見方・考え方を働かせる」「交流・インプットとアウトプット」「振り返り」「評価」「ICT」。研究主題が３年目を終え、教師それぞれの課題意識や教科の特性によって異なることが分かった。 そこで、令和７年度は「主体的に学び続ける生徒の育成」という主題を継続した４年次研究として、サブテーマを各自設定する。一律一斉型の研究ではなく、研究主題へ迫るサブテーマを各自の興味関心に基づいて選び、研究を進めていきたい。		
研 究 の 目 標	「主体的に学び続ける生徒の育成」に迫るためのサブテーマを個人で設定し、授業作りの工夫について交流することで、それぞれの視点を持ちながらも多角的な視点で研究を深め、生徒の主体的な学びにつなげていく。		

研究の内容	(1) 校内研究会を年４回行う。 (2) 全職員が授業研究会、または個人実践「ひとり一授業」で授業を行う。 (3) 週１回の研究推進委員会で研究内容や研究の重点について明確にし、それらを校内研修会で発信しながら共有化を図り、全職員の共通理解の下で研究を進めていく。また、研究の進捗状況を運営委員会で学習指導部長により共有する。 (4) 教科部会を週１回時間割の中に組み込む。教科部会で研究主題に迫る授業構想や指導案の検討を行う。 (5) 教科の枠にとらわれず授業を参観する「教員相互の授業参観」を行い、参観の視点に沿って参観カードを記入し、授業者にフィードバックすることで授業者と参観者の授業改善に取り組む。 (6) 年度初めに生徒と目指す姿を共有する。また、各学期で研究主題に沿ったアンケートを実施することで、生徒の実態を把握し、次に生かす。
研究の重点と実践	「主体的に学び続ける生徒の育成」 サブテーマを個人研究として各自設定する 主題に迫るためのサブテーマを各自の興味関心に基づいて選ぶので、協議の場面で話し合いの柱が定まらない恐れがあるが、興味関心が同じであるテーマごとグループを作り、週に１回の教科部会に加えて、悩みや成果や課題をグループで交流する場を校内研究会の中で設定することで、多角的な視点で授業作りを深めることができると考えた。 (1) 各自が設定したサブテーマ・教科の本質に基づいた「目指す生徒の姿」の設定 (2) 各自が設定したサブテーマ・教科の本質に基づいた「指導の工夫」の設定
研究の計画	１学期 ・今年度の研究の方向性、研究計画について検討 ・職員会議（４月）「研究概要」 ・第１回校内研修会（５月） ・目指す姿について初発指導で生徒と共有する ・七中校区合同授業研修会および第１回授業研究会（６月） ・第１回生徒対象アンケートの実施と結果の分析 ２学期 ・第２回授業研究会（９月） ・第３回授業研究会（１１月） ・教員相互の授業参観 ・ひとり一授業 ・第２回生徒対象アンケートの実施と結果の分析 ３学期 ・ひとり一授業 ・教員相互の授業参観 ・第３回生徒対象アンケートの実施と結果の分析 ・第４回校内研究会（２月） ・職員会議（３月）「まとめ」 ・研究紀要作成

<様式>

学 校 名	山形市立第八中学校 山形市村木沢字河原田 1620 番地の 2 TEL 023-643-2241 FAX 023-645-8496	校 長	長沼 政直
		研究主任	高橋 永子
研 究 主 題	「自立した学習者」を育てるために（3 年次） ～「学びの輪」を活用して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校は「創造・貢献・自立 ～地域と繋がり、新しい時代を拓くたくましい生徒を育てる学校～」を教育目標に掲げ、「自ら学び、考え、表現できる生徒 自他のいのちを敬い、地域に貢献できる生徒 向上心にあふれ、主体的に行動できる生徒」を目指して、教育活動を行っている。その目指すところは、文部科学省中央教育審議会の答申（令和 3 年 1 月）、『令和の日本型教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」にある理念に通じている。 先の答申では急激に変化する時代の中で、先行き不透明な「予測困難な時代」にたくましく生きていくために、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが必要」としている。 本校の生徒は、明るく素直で、与えられた課題に前向きに取り組む姿が見て取れる。また各小学校で少人数の単学級、あるいは複式学級のもと、手厚い支援を受けながら個の特性に応じた、豊かな学びを積み重ねた結果、授業の話し合い活動でしっかりと自分の意見を述べたり、生徒会活動に積極的に立候補したりする姿が多く見られる。与えられた場面・状況において一生懸命取り組める一方で、生徒自らが自身の学習状況や、学習に向かう姿勢を振り返り、課題を見つけたり、改善方法を考えたりする力は、十分に身に付いていると言いがたい。生徒一人一人を「自立した学習者」に育てることを目指した教育実践を通し、豊かな人生を切り拓くことのできる生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。 研究 1 年次は 3 つの重点項目（振り返りの工夫、課題設定やまとめの工夫、対話の工夫）を意識した授業づくり、2 年次は「学びの輪（見通し、行動、振り返りのサイクル）」を意識した授業づくり、3 年次は「学びの輪」を回しながら、授業の中で非認知能力を高めることを意識した授業づくりを目指していく。		
研 究 の 目 標	以下に示す生徒の育成を目指し、研究を進める。 1 単元全体や本時で学習することは何かを把握し、どのような方法を用いればその課題を達成することができるのかを考え、見通しをもつことができる生徒。 2 自分で立てた計画や方法に沿って、粘り強く課題に取り組むことができる生徒。 3 取り組みの結果、課題を達成できたのかどうか、また自分の取り組み方は課題達成に向いていたのかどうかを振り返り、成果と課題を明確にした上で、次の学習課題に生かすことができる生徒。		

研究の内容	1 「学びの輪」を活用する (1) 視覚化 「見通し」「行動」「振り返り」の3つの過程を意識させるために図に表し、教室掲示する。 (2) 生徒と共有 授業者のみならず、生徒も「学びの輪」のサイクルを回せるように意識した課題設定を行う。 (3) 授業での活用 授業の中で、それぞれの単元において、「学びの輪」をどんな場面で活用できるかを示しながら、授業を進める。 2 各教科における目指す姿を具体化する 「自立した学習者」の姿とはどのような姿なのかを、教科ごとに明確にする。また「見通す」「行動する」「振り返る」の3つの場面、それぞれにおいても、目指すべき姿を具体的に示し、生徒と共有する。 3 単元を貫く課題設定 その単元でつきたい力を生徒が見通すことができる時間、個別最適な学び・協働的な学びを意識した学習活動を十分に行うための時間、振り返りを生かし次の単元につなげる時間の設定ができるよう、単元計画を工夫し、「学びの輪」を回せるようにする。 4 フォーサイト手帳を活用する (1) 書き込んだ単元テストの日程に向けて、いつ、何を、どのように勉強するのか見通しを持たせる。 (2) 毎朝、フォーサイト手帳を記入する時間を設定する。その日の見通しを持たせる。 (3) 毎週金曜日の終わりの会で、フォーサイト手帳を記入する時間を設定する。週の振り返りや、週末の学習予定、来週の見通しを記入する。振り返りのポイントを示し、適切な振り返りになるよう支援する。
研究の方法	1 全職員の共通理解のもと、研究を進める。そのために、研究部だけでなく、職員ミーティングを行う。小規模校だからこそその強みを生かし、生徒の実態や研究の目標について語り合う場を定期的に設定する。 2 外部講師を招いての研修会を行い、研究に対する学びを深める。 3 授業研究会を行い、事前研・事後研を通し、研究の深化を図る。 4 生徒に学習に関するアンケートを行い、研究の成果と課題を客観的に把握し、授業改善に役立てる。
研究の計画	4月 研究方針の確認 5月 山形市教育委員会計画訪問 (1人1授業の提案) 9月 校内授業研究会、研修会 (外部講師を招いて) 1～3月 今年度の成果と課題の確認、次年度の研究の方向確認、研究集録作成

<様式>

学 校 名	山形市立第九中学校 山形市大字津金沢字中谷地 6 5 7 番地 TEL 6 8 8 - 2 2 2 0 FAX 6 8 8 - 9 0 4 5	校 長	土井 正路
		研究主任	秋場 千幸
研究 主 題	関わり合いを通して 自らを見つめ直し成長する生徒の育成（二年次）		
研究 主 題 設 定 の 理 由	（１）昨年度までの研究から 昨年度「関わり合いを通して自らを見つめ直し成長する生徒の育成」の研究主題のもと、「関わり」と「粘り強さ」に重きを置き、目指す生徒として取り組んできた。「関わり」と「粘り強さ」については一昨年度の生徒へのアンケートと教員のふり返りから、生徒と教員に共通する部分として抽出した。この目指す生徒像である「関わり」と「粘り強さ」には相関関係があると考えている。関わりを通して自分自身の考えや価値観をさらに深められ、他者との関わりの中で粘り強さが高まり、さらに関わりを重ねることで関係も築き深められるのだと考えた。 この具体的な姿が授業内で見られることを目標にして今年度も取り組んでいきたい。 「関わり」 ①誰にでも「わからない」ことを伝え、助けを求められる生徒 ②誰に対しても目を配り、助けることができる生徒 ③関わりを通して、学び合える、教え合える、高め合える生徒 ④関わりを通して、自分自身の考えや価値観を見つめ直すことができる生徒 「粘り強さ」 ①わからないことを自分から訊き、わかろうとする生徒 ②相手にわかってもらえるように、説明する生徒 ③課題解決に向けて、あきらめずに取り組める生徒 ④自分の弱点を見つめて、何度も解き直し、復習重ねる生徒		
研究 の 目 標	上記のめざす生徒像でも「関わり」の４つの姿は表出しやすいため教員が生徒の成長を見取ることができる、集団で学ぶ良さを生徒自身が実感できる、という２つの理由から、今年度も特に「関わり」に重きを置く。「関わり」の生徒像を実現させるために、めざすゴール（生徒像）を明確にし、そのための手立てについては各教科で工夫できるようにしたいと考えた。教科部会を中心に授業づくりと授業改善を行うことで、教科で授業をつくる認識を大切にしていきたい。 また、昨年度の目標であった「この具体的な姿が授業内で見られることを目標にして、教員と生徒で共有していきたい」ということについて、教員と生徒での共有がまだまだ図られていない。しかし、教員だけでは目指す生徒像にはたどり着けず、生徒自身の向かう意識が必要であると考え。本校の生徒は「関わり」を大切にしたいと考えており、関わりを通して成長を実感している生徒も多い。アンケートの結果からも、生徒たちは班活動の時間を増やしてほしいと考えていることがわかった。そこで今年		

	度は授業内で生徒同士が関われる時間を意識的に組んでいきたいと考える。関わり合いの中で、主体性がより磨かれたり、理解力や応用力をさらに高めていけたりすることで、最後は自分自身を見つめ直すことができる生徒を育成したい。今年度はその機会の設定が進むように少しずつ研究を推進していきたい。
研究の内容	今年度は以下のように研究を推進する。 学習指導案：「学校研究との関わり」の項目にめざす生徒像に近づくための手立てを記入する。 「本時の指導」の右側の欄に「関わり③」などと記載し、授業内での教員のねらいを明確にする。 事後研究会：めざす生徒像に近づけていたかどうかを、授業中の生徒の具体的な姿を取り上げながら話し合うことで分科会を行う。
研究の方法	(1) 授業実践の蓄積 一人一授業：全員学習指導案を書くことで授業改善を目指す。 ①指導主事等を招聘する授業研究会を年1回実施する。授業者は3名を予定。 ②それ以外の教員は、週に1回、時間割に組み込まれる教科部会で、授業を提供し、同じ教科の先生やその時間が空いている先生同士で参観する。翌週の教科部会で事後研を行い、授業改善を図る。学習指導案では評価のバランスやB評価の生徒の具体的な姿をイメージすることを大切にする。 (2) 事後研による振り返り めざす生徒像にせまれていたか振り返り、日々の授業に活かす。
研究の計画	5 / 2 6 (月) 職員会議 (今年度の研究についての提案) 9 / 1 7 (水) 校内授業研究会 ～2学期末 授業実践「一人一授業」提案終了 ⇒各教科から成果と課題の提出 1月下旬 研究推進委員会 ⇒各教科の成果と課題を受け、来年度の学校研究の検討 3月上旬 来年度の学校研究の方向性決定 ⇒全職員の承認を得て、来年度実践できるよう準備を進める

<様式>

学 校 名	山形市立第十中学校	校 長	高 橋 修
	山形市若宮一丁目 1 0 番 1 2 号 TEL 643-1236 FAX 645-8315	研究主任	石 川 安 江
研 究 主 題	「ゴール」を見据えてチャレンジし続ける生徒の育成（２年次） ～学びの主体性と自己調整力に着目して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校の教育目標は「変化する時代を生きぬく、優しさと逞しさを持つ生徒の育成」である。その目標に向け、「自他を尊重し、主体的に考え、行動できる生徒（＝優しさ）」、「学びを生かし、夢や目標に向かって挑戦する生徒（＝逞しさ）」を目指す生徒像として捉え直し、本主題を設定した。 昨年度は、「生徒が明確なゴールを描けるような課題設定の工夫」、「主体的・対話的で深い学びの工夫」、「振り返りの工夫」の３点を研究の柱として設定し、それに基づいて研究を進めた。中でも「主体的・対話的で深い学びの工夫」に重点を置き、ICT 機器を活用しながら研究テーマに迫った。昨年度 12 月に実施した生徒用の学習アンケートにおいて、授業で ICT 機器を活用することで「たくさんの考えに触れることができた」「分かりやすく表現することができた」という記述がみられた。 このことから、ICT 機器の活用は、多様な考えの共有や自分の考えを伝えるのに有効であり、さらに、考えを深めたり再構築したりする機会につながるということがわかった。また、教員が年間を通して、ICT 機器の活用方法を学ぶ機会を設けたことで、具体的にどのように授業実践につなげることができるか、どのようにドリルソフトを使用していけば効果的かを考える機会となった。一方、生徒用の学習アンケートにおいて、授業の課題と単元課題を意識しながら授業に臨むこと、振り返りから自分の学びを見直すことに対する認識が低いことが分かった。これに対し、教員用の学習アンケートでは、同じ項目への評価が生徒よりもやや高く、生徒と教員の認識に一定の差があることが明らかになった。こうした実態を踏まえ、「ゴールを見据えてチャレンジし続ける」ためには、生徒と教員が単元を通して身につけた力を共有し、その成長について共に振り返ることが重要である。特に、「チャレンジし続ける」には、生徒自身が自分なりに問いを持ち、その問いに向かって自分の考えを深め、次の問いへとつながっていく必要がある。 以上のことから、本年度は、「問いを引き出す学習課題設定の工夫」、「伝える力を育む学び合いの工夫」、「自己調整力を育む単元計画の工夫」の３点を重点としたい。生徒自身の問いのもと、見通しを持って学びに向かい、仲間との学び合いを通して自分の考えをより深め表現することで、自身の考えが再構築し続ける姿を目指して本研究を進めていきたい。		
研 究 の 目 標	① 自らの問いを解決するために基礎情報を集めることのできる力、知っている知識を関連付けて活用できる力を育成する。 ② 根拠を明確にして自分の考えを伝える力、人とかかわりを通して自分の考えを再構築する力を育成する。 ③ 自らの問いに向かって見通しをもち、学びを振り返ることで次の学びへつなげる力を育成する。		

研究の内容	(1) 問いを引き出す学習課題設定の工夫 ① 「知りたい」「調べたい」きっかけとなる単元・学習課題を設定する。 ② 生徒が課題解決に必要な情報を集め整理する場面を設定する。 ③ 整理した情報をもとに、自分の考えを伝え合うことで、次の問いへのきっかけをつくる。			
	(2) 伝える力を育む学び合いの工夫 ① 根拠や思考過程を可視化しながら、一人ひとりが自分の考えを深める場面を設定する。 ② 他者の考えに触れることで視野を広げ、自分の考えを更に深めるため、個人と集団での学びを行き来できるようにする。			
	(3) 自己調整力を育む単元計画の工夫 ① 単元目標と、単元における資質・能力を生徒と共有し、学びへの見通しをもつ。 ② 評価規準をもとに、生徒が次の学びへとつながるよう評価から改善への過程を適宜行う。			
研究の方法	① 定期的に、または必要に応じて研究推進委員会を開き、検討、調整、確認を行う。また、全職員の共通理解および学年部会等で生徒理解を図る。			
	② 定期的に教科部会を開き、教科の研究テーマ・単元計画等を検討し、授業研究を積み重ねる。(教科部会における事前および事後研究の充実化)			
	③ ICT 機器の利活用に関する研修会の充実を図る。(夏季休業中の講習会、ICT 支援員による講習)			
	④ 校内授業研究会を 2 回実施し、事前・事後研究会での学びを通し、授業改善を図る。			
	⑤ 各教科で育成を目指す資質・能力を明確にし、単元計画の充実を図る。			
研究の計画	4 月	・校内研修会① (研究の概要について)	～1 1 月	・研究会で授業提供がない教科の授業実践
	5 月	・校内研修会② (授業づくりの視点について)	1 月	・教科部会にて、校内研究のまとめ
	6 月	・教科部会	2 月	・研究推進委員会にて今年度の成果と課題のまとめ
	7 月	・第 1 回校内授業研究会	3 月	・研究紀要によるまとめ
	8 月	・ICT 研修会		・来年度に向けて検討
	9 月	・教科部会		
	10 月	・第 2 回校内授業研究会		

<様式>

学 校 名	山形市立金井中学校 山形市陣場3丁目12-25 TEL 6 8 1 - 8 4 7 4 FAX 6 8 4 - 6 6 2 4	校 長	山田 博志
		研究主任	丸子 尚志
研 究 主 題	生徒の問いを引き出し、考え抜く生徒の育成 ～ICT を効果的に利活用する授業づくりを目指して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校では今年度より、金井中教育目標を「貢献 自立」と定め、「社会に役立つ力」「自分らしく生きる力」を育み、「貢献する、自立した人」を目指して日々の教育に取り組んでいる。 昨年度までは、山形市の情報教育推進校の委嘱を受けて、研究主題「よりよく生きるために共に考え抜く生徒の育成～ICT を効果的に利活用する授業づくりを目指して～」のテーマのもと、授業づくりを行ってきた。研究を通して、生徒が主体的に学習に取り組む授業をつくるには、生徒にとって魅力的な単元の課題や見通しの持てる単元構成になっていること、協働的に学ぶには ICT の他者参照や共同編集がツールとして有効であることが確認できた。また、授業を振り返り、生徒が学ぶことの有用感を実感したり、何が分かって何が分からないのか、メタ認知をしたりすることで次の学習への意欲へつながっていくこと等の成果が得られた。主体的な学びや協働的な学びには、授業の中で生徒自身が疑問や課題意識を持つことが重要であることが再認識できた。振り返りでは、他者の振り返りの参照や一覧で確認できる「デジタル振り返りシート」をつくり、活用してきた。 一方で、浮かび上がった課題もある。1つ目は主体的な学びを引き出す手立てが、生徒自身の疑問や課題意識と結びついていないと本当の意味の主体的な学習にならないこと。2つ目は各教科で行う振り返りが何をねらっているものなのか、どんな振り返りがどのように生徒の学習に寄与するのかを明確になっていなかったことである。特に振り返りの内容や質に関しては、教師の授業と表裏一体のものであり、この点からは教師の授業改善の必要性も見えてくる。また、各教科で実践を積み重ねてきた一方で、道徳等においてはそれらの各教科の積み重ねが生かしていない現状があり、改善していきたい点として挙げられる。 今年度の研究は、特に「振り返り」に焦点化し、生徒の「振り返りシート」を通して、教師が生徒の疑問や課題意識を把握し、引き出しながら授業をつくっていくこと、生徒は自らの学習を振り返りながらメタ認知する力を高め、学習の過程で試行錯誤していくことで、課題の解決のために考え抜く力を育てることを目指す。それにより、金井中教育目標の「貢献 自立」の具現化することを目指し、研究主題を設定した。		
研 究 の 目 標	・生徒の「振り返りシート」を通して、教師が生徒の疑問や課題意識を把握し、引き出しながら授業をつくっていくことで、生徒が主体的に取り組む授業作りを行う。 ・生徒が振り返りを蓄積し、自らの取り組みの足跡が見えるようにし、自らの学習を試行錯誤し、改善していけるようにする。それにより、疑問や課題が解決するまで考え抜くことができる生徒を育てる。 ・意見の交流や振り返りの場面等の学習活動で効果的にICTを活用し、協働的な学びを推進する。それにより、疑問や課題の解決に向けて他者と協働して取り組むことができる生徒を育てる。 ・道徳教育にも振り返りを取り入れ、自らのまなびや気づき、道徳的価値に対しての考えや記録を蓄積する。それにより、生徒が自らの道徳的価値の深まりや広がりを実感できるようにする。 ・生徒につけたい6つの力（感謝できる力、あきらめない力、対話力、かかわる力、伝える力、ICT利活用力）を発揮する場面を授業や学校活動の中で仕組み、生徒の資質能力向上に活かす。		

研究の内容	主に次の３つの重点（視点）について研究を行っていく。 (1) 生徒の問いを引き出す単元構成、授業の工夫とデジタル振り返りの活用 ・生徒の疑問や課題意識が生まれるような単元課題や単元構成を設定した授業を展開する。その上で生徒の考えを振り返りシートを用いて見とり、適宜授業に取り入れていくことで、より生徒にとって必要感のある授業内容となるようにする。 ・振り返りを蓄積し、他者の振り返りを参照しながら学習を進めることで、自分とは異なる考えに触れたり、自らの学習に取り入れたりして、生徒が自らの学習について試行錯誤し改善できるようにする。 ・振り返りを行う上で何に注目して振り返りを行うか、何のために振り返りを行うかを教科ごとに協議し、授業で実践していく。 ・振り返りには教師が適宜フィードバックや価値付けを行い、振り返りの内容や質の向上を図る。これにより、振り返りの積み重ねが生徒の学習意欲の向上や学習の試行錯誤に寄与するかを検証する。 (2) 道徳教育の充実 ・道徳の授業にも振り返りシートを取り入れ、自らのまなびや気づき、道徳的価値に対する考えを記録していく。それにより、生徒が自らの道徳的価値の深まりや広がりを実感できるようにする。 ・新しくなった道徳の教科書、道徳ノート等を十分に活用する。 (3) 「つきたい力」を意識した授業づくり ・生徒、職員とで６つの「つきたい力」を共有し、授業ではつきたい力を適宜提示して意識付けを図る。 ・授業や学校行事等、教育活動全般において「つきたい力」を発揮する活動や場面を仕組み、それに向かう生徒の姿を認め、価値づけていく。																						
研究の方法	(1) 週１回の研究推進委員会で協議し、それを全職員と共有しながら研究を行う。 (2) 各教科における「目指す生徒像」「見方・考え方」を明確にし、年間計画を元に各単元の「単元を貫く学習課題」や「単元計画」を教科部会で、随時検討し、必要に応じて改善を加えていく。 (3) 各教科部会で指導案検討や授業改善、デジタル振り返りの活用方法についての検討、改善を行っていく。 (4) 全職員が一人１授業を行い、各教科部会で授業参観や事前事後検討会を行う。 (5) 外部講師（教科指導：菅原弘一先生、道徳指導：福島信也先生）を招聘し、研修の機会を持つとともに、研究への助言をいただく。いただいた助言を日々の授業作りの実践に反映する。 (6) ICT 機器操作研修会として、全体研修会や教科部会を使ったワンショット研修会を行い、全職員のICT利活用力の向上を図っていく。 (7) 年２回（７月、１２月）の生徒アンケート、職員アンケートから成果と課題を共有し、授業改善や次年度の研究につなげていく																						
研究の計画	<table border="0"> <tr> <td>4月20日（日）</td><td>校内研修会（校内研究のオリエンテーション）</td></tr> <tr> <td>5月9日（金）</td><td>校内授業研究会（道徳）</td></tr> <tr> <td>6月～12月</td><td>一人１授業実践（教科部会で実施し、教科部員は参観する）</td></tr> <tr> <td>6月5日（木）</td><td>宮城教育大学教職大学院 菅原弘一先生来校 研究打ち合わせ①</td></tr> <tr> <td>7月下旬</td><td>生徒学習アンケート①実施</td></tr> <tr> <td>9月11日（木）</td><td>公開研究会①（菅原弘一先生講演会（予定））</td></tr> <tr> <td>11月21日（金）</td><td>公開研究会②（森ノ宮医療大学 福島信也先生講演（予定））</td></tr> <tr> <td>12月下旬</td><td>生徒学習アンケート②、校内研究に関する教職員アンケート実施</td></tr> <tr> <td>1月末</td><td>各教科で研究のまとめ作成、検討、完成</td></tr> <tr> <td>2月初旬</td><td>校内研修会（今年度の研究のまとめ 菅原弘一先生（予定））</td></tr> <tr> <td>3月初旬</td><td>研究紀要『研究と実践の記録 一つ心』発行</td></tr> </table>	4月20日（日）	校内研修会（校内研究のオリエンテーション）	5月9日（金）	校内授業研究会（道徳）	6月～12月	一人１授業実践（教科部会で実施し、教科部員は参観する）	6月5日（木）	宮城教育大学教職大学院 菅原弘一先生来校 研究打ち合わせ①	7月下旬	生徒学習アンケート①実施	9月11日（木）	公開研究会①（菅原弘一先生講演会（予定））	11月21日（金）	公開研究会②（森ノ宮医療大学 福島信也先生講演（予定））	12月下旬	生徒学習アンケート②、校内研究に関する教職員アンケート実施	1月末	各教科で研究のまとめ作成、検討、完成	2月初旬	校内研修会（今年度の研究のまとめ 菅原弘一先生（予定））	3月初旬	研究紀要『研究と実践の記録 一つ心』発行
4月20日（日）	校内研修会（校内研究のオリエンテーション）																						
5月9日（金）	校内授業研究会（道徳）																						
6月～12月	一人１授業実践（教科部会で実施し、教科部員は参観する）																						
6月5日（木）	宮城教育大学教職大学院 菅原弘一先生来校 研究打ち合わせ①																						
7月下旬	生徒学習アンケート①実施																						
9月11日（木）	公開研究会①（菅原弘一先生講演会（予定））																						
11月21日（金）	公開研究会②（森ノ宮医療大学 福島信也先生講演（予定））																						
12月下旬	生徒学習アンケート②、校内研究に関する教職員アンケート実施																						
1月末	各教科で研究のまとめ作成、検討、完成																						
2月初旬	校内研修会（今年度の研究のまとめ 菅原弘一先生（予定））																						
3月初旬	研究紀要『研究と実践の記録 一つ心』発行																						

<様式>

学 校 名	山形市立高楯中学校 山形市大字中里 38 番地 TEL 6 8 6 - 6 0 2 9 FAX 6 8 6 - 4 1 8 5	校 長	星 川 仁 一
		研究主任	根 本 寛 尚
研 究 主 題	よりよく生きるために学びを深め合う生徒の育成（3 年次） ～ I C T の効果的な活用を通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	1 学校教育目標から 本校では令和元年度より、「ふるさとを愛し、未来に向かって、明るくたくましく生きる情操豊かな人間の育成」を学校教育目標として掲げ、時代の変化と地域の期待に応える教育活動を行っている。学校研究でも、学校教育目標を受けて同年度より 4 年間「主体的・協働的に学ぶ生徒の育成」を研究主題として設定し、各教科の実践を通して研究を深めてきた。重点としては、「主体的」な学びに導く課題設定や課題提示、「協働的」な学び合いに関わる指導過程の工夫、「振り返り」の工夫を視点として授業を展開してきた。また、G I G A スクール構想のもと進められた「1 人 1 台の端末」は授業改善のための大きな手助けになったこともあり、令和 4 年度・5 年度は、「I C T の効果的な活用」を意識して研究を進めた。本校の強みであるの I C T 活用について、令和 5 年度から副題として継承した。生徒の I C T 活用が進んでいる一方で、課題を深く追究する、社会や自然など日常生活と結び付けて考えるなど、いわゆる“深い学び”を実現できている生徒が少ないように感じている。“深い学び”の目的を、“よりよく生きるため”と捉え、“深い学び”に向かう生徒の育成を通して、学校教育目標の達成に繋げていきたい。 2 生徒の実態から 本校の生徒は素直で前向きに取り組める生徒が多く、授業、生徒会活動、行事ともに仲間と協力しながら取り組んでいる。また、前年度までの研究を通して、生徒の課題に対する向かい方、生徒同士の学び合いなど、学びに向かう姿勢は確かな形で育まれている。I C T 活用についても、調べ学習、協働学習、発表などの多様な場面での活用を経験してきており、I C T の利点について認め、進んで活用しようとする姿が見られる。 一方、課題を深く追究したり、社会や自然など日常生活と結び付けて考えたり、広げ深めたりすることを苦手としている生徒が多い。I C T も効果的な活用のためのスキルを徐々に身につけてきてはいるものの、I C T を活用しながらよりわかりやすい説明をする工夫などができていない。また、考えたことについて自信をもって発表する、適切な言葉で表現するなどの“アウトプット”の作業を苦手とする生徒が多い。 3 今日的な課題から 現代は、グローバル化や情報化などが急速に進展する社会である。生徒を含め現代を生きる私たちの周りには様々な課題があり、私たち自身がともに手を携えてその解決に当たっていくことが求められている。学習指導要領の趣旨である「主体的・対話的で深い学び」もこの流れを汲むものであり、生徒同士が多様な考えを出し合って協働的に学び、自分の考えを広げ深める学びを通しながら、課題の解決に向かっていく力を育むことは、現代の社会を色濃く反映した学びの姿といえる。 そして本質的な課題には、世界との関わり・歴史的な出来事・私たちを取り巻く環境や変化・その		

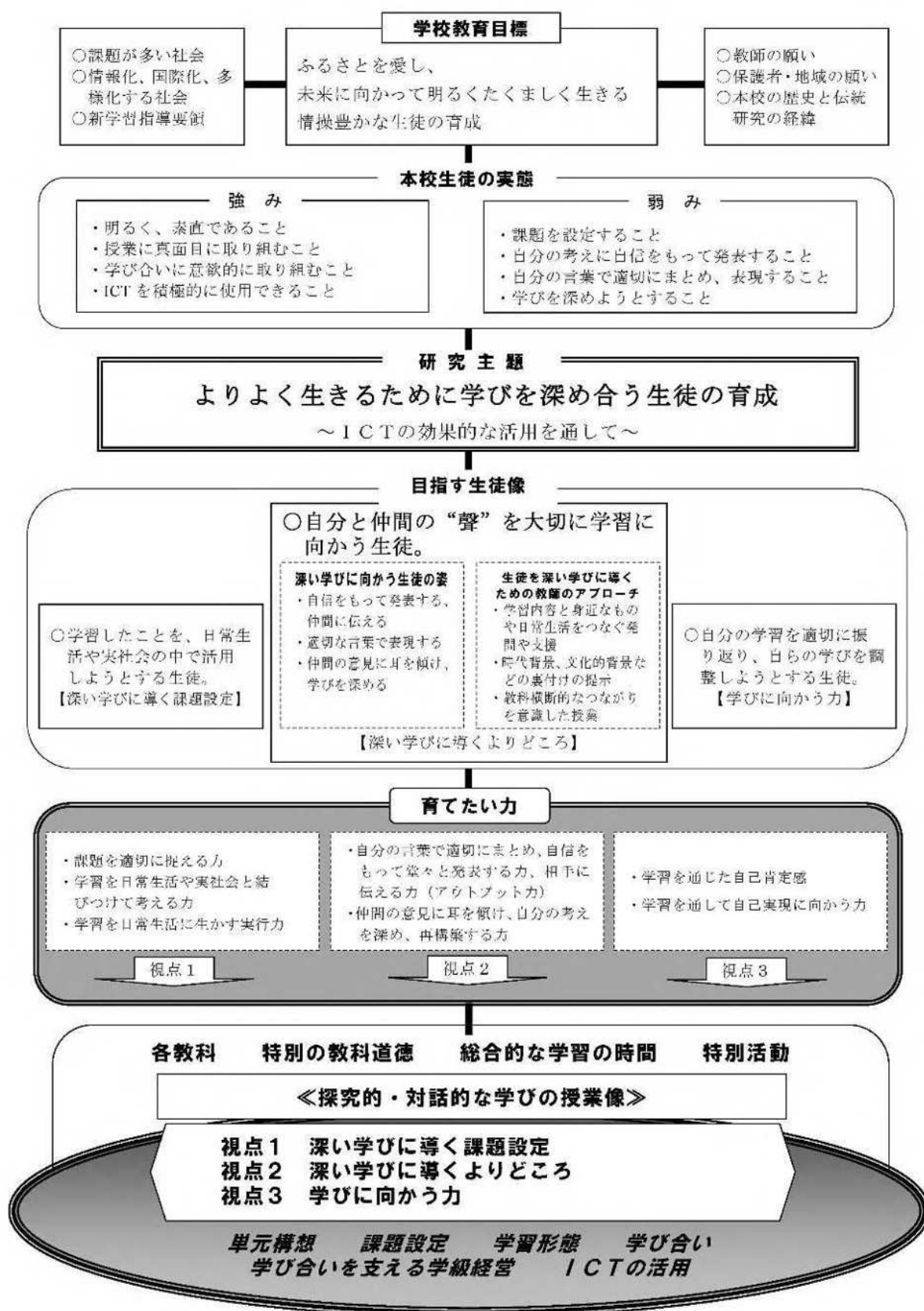
	他の背景になるものが多いことが見えてくる。そのような中で、日常生活や私たちを取り巻く事象としっかり向き合って「深く」考えることこそ、課題解決に向かう姿と言えるのではないかと考える。 これら3つの視点から判断し、本校での研究主題を『よりよく生きるために学びを深め合う生徒の育成～ICTの効果的な活用を通して～』（3年次）として定めた。
研究の目標	ICTを活用した主体的・協働的な学びを通して課題を解決し、よりよく生きていくための「深い学び」に向かう生徒を育てることを目標とする。そのために深い学びの姿を分析してとらえ、「深い学びに導くためのよりどころ＝資料や手立て」を明らかにしながら、授業改善を通して生徒の変容を追求していく。
研究の内容	視点に沿った実践を集め、その方法を共有することで授業改善に努める。これまでの研究の実践を活かしながら、「興味・関心」にかかわる授業づくりの核となる『深い学びに導く課題設定』、教科の本質となる「資質・能力」を活かす『深い学びに導くよりどころ』、最後に「学びに向かう力・人間性」を高めるための『学びに向かう力』の3つを視点として研究を進めていく。 視点1 深い学びに導く課題設定 ……………興味・関心 ○実生活や実社会との関連を図った課題 ○生徒の興味・関心、疑問に基づいた課題 ・魅力的な課題であるか。 ・必要感や有用感があるか。 ・既習事項に基づいた課題であるか。 ・ICTを活用した視覚化による課題提示。 ・学ぶ意欲を高める提示の工夫をしている。 ・生徒が「楽しそう、ワクワクする」と感じる魅力ある課題。 アウトプット力を高めることに重点をおく ① アウトプットの機会（授業、行事、生徒会等） ② アウトプットの方法（言語、レポート、ICT等） ③ アウトプットによる深まりの確認（自己評価、変容等） ○令和6年度までの工夫点を継承 ①教科の本質に即した「魅力ある多様な課題」の設定 ②必要感や有用感がある「学習課題」の設定 ③生徒の「興味・関心、疑問に基づいた課題」の設定 ④「日常生活との関連を図った課題」の設定 ⑤既習事項やレディネスに基づいた課題の設定 ⑥ICT機器を活用して導入を工夫した課題の設定 ⑦学ぶ意欲を高める提示の工夫をした課題の設定 視点2 深い学びに導くよりどころ ……………知識・技能、思考・判断・表現 ○身近なもの、生活、現象とのつながり ○時代背景、文化的背景などの裏付け ・例えば3年生の国語、『故郷』では、戦時下における中国の時代背景と結び付けることで作品をより深く理解できるように導くことができる。そのように教科の特性に応じて、背景とのつながりをもたせて深めていくことができないか。 ○教科横断的なつながり ・カリキュラムデザインに基づいて、教科間の連携を図りながら単元を構成し、統合的な学習に近づけていくことができないか。 ○ICTの活用 ・協働学習や意見交換などの場面を中心に、生徒がICTを活用することで、深い学びに繋がられないか。 ・カリキュラムデザイン表や教科横断的な内容を反映させた年間指導計画の活用 ・教科横断を意識した単元づくりや授業づくり 視点3 学びに向かう力 ……………学びに向かう力・人間性 ○意欲を育み、持続させるための手立て ・課題設定時における意欲付けとは別に、展開部分での意欲を持続させるための工夫がある

	のではない。 ・学習計画や学習の振り返り、自己有用感とともに主体的な学びを促すための工夫があるのではない。 ○学びの方向を修正しながら学び続けるための手立て ・単元全体における現在位置の確認や振り返りなどを通して、学びの方向をとらえなおす工夫があるのではない。 ※ “学びに向かう力” のイメージ The diagram illustrates the process of learning as a continuous flow. At the top, a large orange arrow points right, labeled '学びに向かう力（学習意欲の持続、学びの方向の確認など）'. Below this, a grey arrow also points right, divided into three sections: '導入：魅力ある課題の提示 → 生徒のワクワク感', '展開：意欲を持続させる工夫 → 学びの広がり深まり', and '終末：振り返り → 「もっと学びたい」、次の学習への繋がり、新たな課題や疑問、学びの方向の修正'. Below the grey arrow, two boxes are connected by lines to the '展開' and '終末' sections respectively. The first box is labeled '学びの意欲を持続させるための工夫' and the second is labeled '従来の振り返り + 各教科の工夫'.
研究の方法	1 各教科では、他教科との関連を見通した年間指導計画と深い学びの実現のための授業場面の創造の視点からの単元を構成をする。 2 担当教科のどの単元について研究を進めていくか各自決定する。年度末の研究のまとめでは、単元の構想、指導計画と研究成果などを紀要に掲載する。 3 研究する単元の探究的な学習の構想を「単元計画」として示し、その中の1時間を研究授業として提案する。その際、研究の視点からのアプローチを本時の中に示すようにする。 4 授業研究会では、可能な限り助言者・研究協力者の先生から助言を得て、授業改善に努める。 5 7月23日（水）の村山教育事務所の計画指導訪問での授業公開を、例年の年2回の校内授業研に充てる。例年6月ごろに行っていた校内授業研を、指導案作成のための事前研として扱う。教科ごとや実技教科のグループなどで、指導案について検討する。計画指導訪問時の事後研は全体では行わず、各教科で助言をいただく。 6 例年、前後期で行っていた小研についても、計画指導訪問に充てる。全員が指導案を作成し、助言をいただく。 7 例年10月ごろに行っていた校内授業研を、ICT活用などについての研修の場として扱う。 8 研究紀要『大岡』には、計画指導訪問でいただいた助言を反映させた指導案を掲載する。 9 小研を計画指導訪問に充てるため、後期に『授業公開ウィーク』を設定し、お互いの授業を気軽に参観する機会を設ける。（略案の作成はしない） 10 日常からの授業改善のために、教科群を越えたグループを作り、普段の授業から参観しながら研修を深める。

研究の計画

研究計画

日付	研究内容	
4/2(水) 4/3(木)	研究推進委員会① 今年度の研究の方向性、研究計画の検討	推進委員会
4/3(木)	研究推進委員会（教科主任会） 評価の確認	教科主任会
4/4(金)	校内研究会① 今年度の研究の方向性、研究計画	研究会
5/7(水)	研究推進委員会② 6月の授業研に向けての準備	推進委員会
5/12(月)	学年部会 授業の教科・クラス検討→調整開始	学年部会
5/19(月)	運営委員会 計画訪問時の臨時時間割の提案	運営委員会
5/21(水)	生徒の実態調査：学習アンケート①	実態調査
5/26(月)	職員会議 教科・クラス及び臨時時間割決定	職員会議
6/2(月)	学校と学校担当指導主事の調整開始	
6/2(月)	校内研究会② 計画指導訪問に向けた指導案検討	研究会
6/20(金)	事前訪問 学校の特色、今年度の重点課題と具体的な取り組み説明・授業通覧など	
7/7(月)	指導案提出（委員会経由で教育事務所へ） ※10日前	
7/23(水)	村山教育事務所計画指導訪問	研究会
7/25(金)	研究推進委員会③ 計画訪問の振り返り、校内研究会③の検討、後期の活動の確認	推進委員会
夏休み中	校内研究会③ （令和6年度：教科横断型の連携を図るための研修を実施）	
10/6(月)	研究推進委員会④ 校内研究会④の検討	推進委員会
10月下旬～ 11月上旬	校内研究会④ ICT活用などについての研修会	研究会
10/22(水)	生徒の実態調査：学習アンケート②	実態調査
11月下旬～ 12月上旬	授業公開ウィーク（後期）	グループ研
11/17(月)	研究推進委員会⑤ 教育課程検討	研究推進委員
12/17(水)	研究推進委員会⑥ 校内研究会⑤の検討	研究推進委員
12/24(金)	校内研究会⑤ これまでの実践報告、研究紀要「大岡」の編集についての提案	研究会
1/16(金)	生徒の実態調査：学習アンケート③	
2/9(月)	研究推進委員会⑦ 次年度の研究の内容と方法	推進委員会
3/3(水)	校内研究会⑥ 今年度の成貝と課題、次年度の研究主題と内容・方法	研究会



<様式>

学 校 名	山形市立蔵王第一 中学校	校 長	庄司 雅和
		研究主任	黒田 吉彦
研 究 主 題	他とかかわりながら学びを深め、 表現する生徒の育成(4 年次/最終年次) ～双方向のコミュニケーションに着目して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	1 年次の研究では、「表現する」ことに着目し思考の可視化に力を入れた。成果として、表現する機会の増加や考えを言葉にする力を育てることができた。しかし、表現することが目的となってしまう、生徒の学びの深まりにまで指導が到達することができない課題があった。 2 年次の研究では、学びの深まりのための表現を、授業や単元における「まとめ」と「振り返り」と捉え、学校全体で意識して取り組みを行った。教師が「まとめ」「振り返り」の違いを意識して授業をつくることと、単元構成を意識した振り返り場面を設定することで、生徒の学びの深まりの機会を保障した。その結果、生徒は授業において、課題に正対するまとめを意識して取り組むことができ、授業で学んだことを自分の言葉で整理する力がついた。また、振り返りを通して、自己の変化に気づくことができた。 昨年度 3 年次の研究では、「表現する」際の相手意識に着目した。それは、自分の考えをわかってもらうために、誰に、何を、どのように、伝えるのかを吟味することである。授業におけるペア学習やグループ学習、全体の場において、伝える立場の人は聞き手を意識し、聞く立場の人は伝え手のことを考える力を高める取り組みを行った。生徒の様子を見ると、「自分の考えが相手に理解してもらえたかどうかを、確認しながら説明する姿」や「繰り返しや言い直しをしながら表現したり、学力の低い生徒にも粘り強く説明したりしている姿」が見られた。また、他人の意見を聞き、そこから自分はこう思う、と書ける生徒が増えた。 昨年度までの研究では、相手と関わる機会を意図的に増やし、自分の考えを伝える力の向上を目指してきた。実践を積み重ねてきたことで、確かに本校の生徒に伝える力はついている。しかし、生徒の実態としては、相手の意見を踏まえて自分の考えを述べることに課題がある。そのため、今年度は双方向のコミュニケーションに着目して、より良い考えを求め、学びを深めていく生徒の姿を目指していきたい。		
研 究 の 目 標	各教科の特性や本質を生かし、「深い学び」につなげるための授業改善を進める。また、本校の良さである同僚性の高さを発揮し、学校全体で校内研究を進め、チーム力を高めていく。 ◇目指す生徒の姿 他とかかわりながら学びを深め、表現する生徒		

研究の内容	①蔵王一中生の良さや課題、これまでの研究成果などを整理し、学校全体の目指す姿を構築し、職員全体で共有していく。 ②教科部会で各教科の目指す姿を確認し、必要な手立てを考え、実践していく。 ③一人二授業の中で、教師の指導や生徒の姿を振り返り、授業改善につなげる。 ④校内授業研究会の中で、学校全体の方針を確認していく。 ⑤②～④を繰り返し、今年度の成果を記録としてまとめる。																																								
研究の方法	・年2回の校内研修会〔共通理解、まとめ〕 ・年2回の校内授業研究会（前期：社会、後期：①国語②美術） ・外部講師による研修会（山形大学大学院教授 澁江学美先生） ・教科部会 ・一人二授業 ・校内研究の記録の作成																																								
研究の計画	<table><tr><th colspan="5">令和7年度 研究推進委員会年間計画</th></tr><tr><th>I 節 (4/1～5/26) 「希望」</th><th>II 節 (5/27～7/28) 「鍛錬」</th><th>III 節 (7/29～11/10) 「かわり」</th><th>IV 節 (11/11～12/25) 「学び」</th><th>V 節 (12/26～3/31) 「感謝」</th></tr><tr><td>・校内研修会①(今年度の方針の提案)4/7</td><td></td><td></td><td></td><td>・校内研修会③（次年度に向けて）2/2</td></tr><tr><td>・教科部会（今年度の取り組みについて）</td><td>→</td><td></td><td>→</td><td>・教科部会（年間のまとめ）</td></tr><tr><td></td><td>・研究テーマに沿った授業実践</td><td>→</td><td></td><td>→</td></tr><tr><td>・授業研での授業者決定 →</td><td>・指導案検討 →</td><td>・授業研①5/29</td><td>・指導案検討 →</td><td>・授業研②9/8</td></tr><tr><td></td><td></td><td>・県内外研修派遣</td><td>→</td><td></td></tr><tr><td>・校内研修会の企画 →</td><td></td><td>・校内研修会②8/25</td><td></td><td></td></tr></table>	令和7年度 研究推進委員会年間計画					I 節 (4/1～5/26) 「希望」	II 節 (5/27～7/28) 「鍛錬」	III 節 (7/29～11/10) 「かわり」	IV 節 (11/11～12/25) 「学び」	V 節 (12/26～3/31) 「感謝」	・校内研修会①(今年度の方針の提案)4/7				・校内研修会③（次年度に向けて）2/2	・教科部会（今年度の取り組みについて）	→		→	・教科部会（年間のまとめ）		・研究テーマに沿った授業実践	→		→	・授業研での授業者決定 →	・指導案検討 →	・授業研①5/29	・指導案検討 →	・授業研②9/8			・県内外研修派遣	→		・校内研修会の企画 →		・校内研修会②8/25		
令和7年度 研究推進委員会年間計画																																									
I 節 (4/1～5/26) 「希望」	II 節 (5/27～7/28) 「鍛錬」	III 節 (7/29～11/10) 「かわり」	IV 節 (11/11～12/25) 「学び」	V 節 (12/26～3/31) 「感謝」																																					
・校内研修会①(今年度の方針の提案)4/7				・校内研修会③（次年度に向けて）2/2																																					
・教科部会（今年度の取り組みについて）	→		→	・教科部会（年間のまとめ）																																					
	・研究テーマに沿った授業実践	→		→																																					
・授業研での授業者決定 →	・指導案検討 →	・授業研①5/29	・指導案検討 →	・授業研②9/8																																					
		・県内外研修派遣	→																																						
・校内研修会の企画 →		・校内研修会②8/25																																							